

八月一九日（土）

モノレールを降り、連絡通路を渡って、次の電車が来るのを待っている。特別に急いだつもりはないのに、立ち止まった瞬間からドツと汗が吹き出してくる。

弱冷車で一駅乗っても大した効果は得られないだろうけど、宇野辺で降りて阪急茨木まで延々と歩くことを考えたら、こつちの方が断然マシだ。

もうそろそろ夕方といってもいい時間帯だろうに、まだまだ陽は高く、気温も湿度も一向に落ちる気配がない。乗り継ぎまでまだ二、三分あるのなら、道中のコンビニで何か買えば良かった。ホームを見渡しても、自動販売機までが遠く感じる。

ポケットからハンドタオルを取り出して一人で汗を拭っていると、ここまで一緒に帰って来た哲朗くんが、黄色い炭酸水を買って戻って来た。間もなく電車が入ってくるアナウンスが流れたが、僕は目の前に差し出されたペットボトルを受け取って、思う存分に水分を身体の中に流し込んだ。一回で半分ぐらいがなくなってしまった。

哲朗くんは哲朗くん、もう一本買っていたらしく、軽く二口ほど飲んで電車に乗り込んだ。僕は慌てて蓋を閉め、彼の後に続いて乗る。向かいのドア前まで進み、ポケットに手を突っ込んだ。

「買い出しさせたみたいで、ごめんね」

小銭を探ってみても、十円玉は切れている。百円玉を二枚摘んで、哲朗くんに差し出すものの、彼は「いいんです」と受け取らなかつた。

「今日一日付き合ってもらいましたし、新田さんにはお昼も出してもらったんで」
「そういえば、エキスポシティでのお昼は新田さんが出してたっけ。」

「学生が遠慮するなって」

「いやいや、数百円なんで」

哲朗くんは、頑なに受け取ろうとしない。「じゃあ、遠慮なく」と小銭をポケットに戻した。窓の外の青々とした風景を眺めていると、あつという間に隣の駅に着いた。茨木市駅のホームから、改札階へ降りていく。

「じゃあ、この後奢ろうか？」

駅前商店街で、瑞希や沙綾と飲む予定になっている。この後の予定も聞かずに誘ってみると、彼は申し訳なきように「行きたいのは山々なんですけど、先約があります」と自分の荷物を大事そうに抱えながら言った。

「瑞希も来るのにな？」

「残念なんですけど……」

彼と横並びで改札を通り抜けた。目の前のエスカレーターで下へ降りる。

「そっか。じゃあ、また今度だ」

「すみません。僕のワガママに付き合ってもらって」

哲朗くんは丁寧な頭を下げて、西側出口へ歩いて行った。僕はそれを見送りながら、東中央商店街の方へ足を向ける。スマホを取り出して時刻を確認するもの、待ち合わせの時間にはまだ少し早い。いつものビアスタンドで一杯ひっかけるか、駅に戻って喫茶店か本屋に入るか。とりあえず、手元のペットボトルを飲み切ってしまう。

通路の端に寄って、スマホを眺める。新田さんから、「今日はありがとう」とメッセージが届いていた。どうやら向こうも家に着く頃らしい。「また月曜日から、よろしく願います」と返事を出し、社内連絡用のチャットツールを立ち上げた。

次の木曜日に、「新田さんの誕生日」という連絡が入っている。しまった、何も用意していない。新田さんも新田さんで、一言言ってくればいいのに――。

初出 令和三年一〇月八日 NOVEL DAYSにて公開